

| | |
|------------------|---|
| Title | ハーバート・スペンサーにおける行動概念 |
| Sub Title | Spencer's concept of conduct |
| Author | 久野, 真隆(Hisano, Masataka) |
| Publisher | 慶應義塾大学倫理学研究会 |
| Publication year | 2019 |
| Jtitle | エティカ (Ethica). Vol.12, (2019.) ,p.57- 96 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20190000-0057 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ハーバート・スペンサーにおける行動概念

久野真隆

はじめに

本稿は、19 世紀の思想家ハーバート・スペンサー（1820-1903）の著書である『倫理学のデータ』（*The Data of Ethics*, 1879）¹において中心的に論じられている「行動」（conduct / behaviour）概念の内容がどのようなものであるのかを明らかにすることを試みるものである。

『倫理学のデータ』は、のちに『倫理学原理』（*The Principles of Ethics*, 1879-93）の中にまとめられることになる著作である。この著作では、挾本（2000）²が指摘するように、一貫して「行動」と倫理の関係について論じられている。

スペンサーが『倫理学のデータ』の中で目標としていることは、この著作の序文の中に端的にまとめられている。それは、科学に基づいて正しい行動の規則を作ることである。

たとえ完遂することができなくとも、この最後の仕事〔総合哲学の完

1 スペンサーは『社会静学』刊行したのち、約 30 年をかけて『総合哲学体系』全 10 巻を刊行した。『倫理学原理』はその最後の著作である。また、同時代の思想家であるヘンリー・シジウィックは、『倫理学原理』はスペンサーの「総合哲学体系」の頂点をなしていると言えると評している。本稿では使用したものは Spencer, H. 1978 [1879-93]. *The Principles of Ethics*. 2 vols, in T. R. Machan ed. Indianapolis: Liberty Fund に収録されているものである。

2 挾本（2000），p.245.

成]を概略として示したい。というのも科学的な基礎に基づいた正しい行動の規則を確立することが、差し迫って必要だからである。今や道徳の命令が、想定されていた神聖な起源によって与えられていた権威を失いつつあるので、道徳の世俗化は必須になりつつある。³ ([]は執筆者)

1870年代になると、スペンサーは『社会静学』(Social Statics, 1851)で採っていた考え方を一部改めたとされている。『社会静学』の執筆時には、神が人間の幸福を定めかつ、神が道徳感覚の源泉であるとスペンサーは考えていた。しかし、『倫理学のデータ』においては、完全に自然主義的な考え方に傾倒している⁴。その傾倒が、「科学的な基礎を持つ行動の規則を確立すること」という文言の中に見て取れる。

本稿で論じるのは、科学的な基礎を持つ行動の規則を確立することを目指したスペンサーが考察している「行動」概念の内容についてである。スペンサーは『倫理学のデータ』の約半分というかなりの紙幅を割いて、「行動」について論じている。

『倫理学のデータ』の前半部では、まず一般的な「行動」の特徴について述べられる(第1章)。そして次に「行動」がどのように進化していくのかについて述べられる(第2章)。さらに、「行動」に関して「善い行動」と「悪い行動」の特徴づけがなされ(第3章)、「行動」に関する善悪を判定する方法が述べられる(第4章)。そして中盤では、「行動」が、身体的観点(第5章)、生物学的観点(第6章)、心理学的(第7章)、社会学的観点(第8章)から説明されている。

このように見てくると、スペンサーはかなり精緻に「行動」について論じていることがわかる。本稿では『倫理学のデータ』の第1章から第3

3 Spencer (1978), p.30.

4 Farber (1998), p.47.

章までに焦点を当て、スペンサーが論じている「行動」概念の内容を明らかにすることを試み、またスペンサーの「行動」概念にまつわる問題を検討する。

第1節 「行動」の一般的特徴⁵

1・1 スペンサーにおける行動概念の概要

本節では、スペンサーが一般的な「行動」に関してどのような議論をしているのか、そして、一般的な「行動」がどのような特徴を持っているのかを明らかにすることを試みる。

第1章「一般的行動」の中で、スペンサーが初めて「行動」という言葉を使用するとき、彼は「行動」について、倫理が関係する行動とそうではない行動を連続的に捉えている。それは次の一文に表れている。

行動とは1つの全体 (whole)、しかもある意味では、行動とは1つの有機的 (organic) な全体である。有機的な全体とは、ある有機体 (organism) によって行われる相互に依存した諸行為 (actions) の総和ということである。行動のうち倫理が扱う部門や側面は、この有機的全体の部分—すなわち、それ以外の部分と不可分に結びつく構成要素を持つような部分である。⁶

スペンサーは、倫理に関わる行動の外延よりも、行動一般の外延を広く想定しており、行動一般の集合の中に、倫理的な行為の集合を想定している。スペンサーは行動を考える際に部分と全体の関係について考察をしている。

5 この節の議論は、『倫理学のデータ』、第1章「一般的行動」(Spencer (1978), pp.37-41) に基づいて展開されている。

6 Spencer (1978), pp.38-39.

そして、部分と全体の関係に関して、「ある部分を完全に理解することは、その全体を広く理解することを含意する」⁷という考え方を持っている。

では、スペンサーの部分と全体の捉え方、および行動一般と倫理的行動はどのように関係しているのだろうか。スペンサーによれば、普段私たちがする行動の中には、道徳性 (morality) が考慮されない行動がある。たとえば、空気の入替えのために窓を開けたり、寒い日にコートを着るという行動がそれにあたる。そしてこれらの行動は、行動全体に対する部分としての行動であると位置付けることができる。

しかし、私たちが行動と呼ぶものの中には、今挙げたような道徳とは無関係な行動に加えて、「善い」(good) ないし「悪い」(bad) とみなされる行動も、行動全体の概念 (the conception of behavior at large) には含まれている。倫理が扱う行動について、スペンサーは以下のような考え方を持っている。

倫理を部分とする全体は、行動一般の理論 (theory of conduct in general) によって構成されている。そして、この全体は、[倫理という] 部分が理解されるよりも前に、理解されなければならない。⁸
([] は執筆者)

スペンサーには、既に指摘したように、「ある部分を完全に理解することは、その全体を広く理解することを含意する」という考え方を採用している。それを踏まえてこの引用部を解釈すると、スペンサーは部分を理解するには全体を理解しなければならないと考えていることがわかる。したがって倫理が扱う行動を理解するには、その前に、行動一般の特徴を理解することがまず必要なのである。

7 *Ibid.*, p.39.

8 *Ibid.*, p.39.

では、行動一般はどのように定義されるのだろうか。スペンサーは、行動一般は諸行為の合計（aggregate）とその外延を同じくするわけではないと述べる。その理由は、スペンサーは目的のない（purposeless）行為は、行動一般から除外されると考えているからである。そして、スペンサーは「行動の定義は、諸目的に対して適応される諸行為、または諸行為が諸目的に適応していくことのいずれかである」⁹というように行動を定義する。このように、行動の定義がなされるので、行動は、一般的な諸行為によって構成される行動の定義よりかは幾分か外延の広い諸行為の全体と区別されることになる。簡潔にまとめると以下のように定式化することができる。

[actions in general (一般的な諸行為)] - [purposeless actions (目的のない諸行為)] = [conduct in general (行動一般)]

行動を定義したのち、スペンサーが次に取り掛かるのは、倫理的判断がなされる行動と、それ以外の行動がどのように区別されるのかという問題である。スペンサーが認めているのは、日常の行動の大半が「善」「悪」に関係ないものであるということである。スペンサーの言葉を借りれば、「普段私たちがしている行動の大半は、目的や手段に関して、善ないし悪だと判断されないもの」¹⁰である。そして、またスペンサーによれば、そのような日常的な行動から善悪の判断がなされる行動への移り変わりが漸次的（gradual）であることも明らかである。

日常的な行動から善悪の判断がなされる行動への移り変わりが漸次的であるとはどういう意味なのだろうか。スペンサーは以下の例を用いて説明している¹¹。もし私たちが滝を見に行くことを目標として設定していた場合、原野を通って行くよりも、森を抜け方がよいという手段について選

9 *Ibid.*, p.39.

10 *Ibid.*, p.40.

11 *Ibid.*, p.40.

択をすることは、もはや倫理に関係ないことではない。ここでスペンサーが想定しているのは、目的や手段を選択すること自体が倫理的な性格 (ethical character) を有しているということである。そして、スペンサーはこれらの例を示すことで「道徳性が考慮されない行動が、道徳性を備える行動に少しずつ変わり、またその変わり方が無数にある」¹² ことを十分に示せたとする。

[はじめに] で引用したように、『倫理学のデータ』において、スペンサーが目的に設定しているのが、科学的な基礎を持つ行動の規則を確立することである。これまでに議論してきた内容と、科学的な基礎を持つ行動の規則はどのように関係しているのだろうか。スペンサーは自身の考えを、以下のように簡潔に表現している。

倫理的な判断の対象となるような行動を科学的に考えることができるよりも前に、行動というものが科学的に考えられなければならない。そうした行動は、倫理的な判断の対象となる行動よりもかなり広い範囲にわたるものである。¹³

倫理的な判断の対象となる行動様式と科学的に考えられる行動の外延は、後者の方が広くなるとスペンサーは考えている。ここで考えられている倫理的な判断の対象となる行動様式とは人間のみの行動である。スペンサーによれば、この人間の行動は全生物の (universal) 行動の一部と考える必要がある。スペンサーは明示していないが、このスペンサーの主張は、先に述べた部分と全体の関係を考慮しているように思われる。

この全生物の観点を踏まえた上で、スペンサーは行動の定義を修正する。修正された行動の定義は、次のように表現されている。

12 *Ibid.*, p.40.

13 *Ibid.*, p.40.

人間の行動と比較される高等動物の行動、また高等動物の行動と比較される下等動物の行動は主に以下の点において異なっている。行為の目的に対する適応がそれぞれ相対的に単純であり、相対的に不完全である。¹⁴

スペンサーは、行為の目的に対する順応度合いについて、人間が一番高く、次に高等動物、そして、最後に下等動物という序列をここでつけている。そして、倫理が扱う行動について理解するためには、人間全体の行動を理解する必要があることは先に述べたが、ここでスペンサーが主張しているのは、人間全体の行動を理解するためには、より外延の大きい動物の行動を理解する必要があるということである。つまりわれわれが考えなければならぬのは、すべての階級の動物が示している行動についてである。したがって、下等動物から始まり、高等動物、人間というようにどのように行動が進化（evolution）してきたのかを研究しなければならないのである。

1・2 考察

第1節では、スペンサーがこの節以降で考える行動概念の基礎について詳細に論じられている。スペンサーの基本的な視座は、全体から部分を考えていくというものであることを確認した。スペンサーは行動一般の考察から、倫理が扱う行動へと話を移していく際に、日常的な行動から善悪の判断がなされる行動への移り変わりが漸次的（gradual）であると考えていた。

このように、漸次的な変化を想定している背景には、ラマルクの進化論があると考えることができるだろう。ラマルクは無機物から完全な存在

¹⁴ *Ibid.*, p.40.

までの漸進的系列というボネー（Charles Bonnet, 1720-1793）の新プラトン主義的見解を採用した。そして、そのボネー考え方に、時間的な移行の原理を加えて修正している。しかし、漸次的な変化はダーウィンの進化論でも想定されていることを忘れてはいけない。ダーウィンは、特定形質の変異の頻度は生存と繁殖の違いによって長期間にわたって変化すると考えているのである。

本節の内容では、スペンサーがどちらの進化論に依拠しているのかを決定することはできない。しかし、確実に言えることは、スペンサーが行動を科学的に考えると言うときには、当時盛んに論じられていた進化思想¹⁵を取り入れているということ、そしてその中に人間、高等動物、下等動物という序列を組み込んでおり、これらの序列は行為の目的に対する適度合いによって決まっているのである。

15 「1860年代はヴィクトリア朝時代の全盛期であり、まさに進歩の時代だった。産業資本家の力が増大し、大英帝国は絶頂期を迎え、世界に植民地を拡大し、植民地戦争が増大する一方で、経済は自由主義の色彩を強めていった。産業革命は全国に鉄道網を拡大し、それに伴って工学技術も急速に発展していた。近代的な科学の芽生えが見られ、上流階級の紳士の多くが博物学に深い関心を示していた。人びとは政治・社会・文化のあらゆる側面で、人類が進歩に向かって前進していることを肌で感じていた。それは神によってつくられた均衡のとれ安定した社会というものに不信を抱かせるに十分なものだった。[…中略…] 社会思想的には個人主義、自由主義的な思考の流れで、オーギュスト・コントやジョン・スチュアート・ミルなどが、ラマルクの影響を受けて社会の歴史を発展論的に捉えるという動きがあった。したがってこの時代の英国では、進歩一般を自明とする空気があり、それに科学的なお墨付きを与える進化論の登場は喝采をもって迎えられた。」（垂水（2014），pp.139-140）

第2節 「行動」の進化¹⁶

2・1 人間以外の動物に関する「行動」の進化

倫理が扱う行動についての理解するためには、人間全体の行動を理解する必要があること、そして、部分と全体の関係を考察する際には、全体の考察から始める必要があるとスペンサーが考えていることを前節で確認した。つまり、人間の行動の理解には動物の行動を理解が必要不可欠なのである。このような考え方は行動の進化を論じる際にも当てはまる。したがって行動の進化を研究する際には、下等動物の行動、高等動物の行動、人間の行動を順に見ていくことで、どのように行動が進化してきたのかを研究する必要がある。

では、スペンサーは行動はどのように進化すると考えているのだろうか。スペンサーは行動の進化の枠組みを考えるために、まず身体構造 (structure) と身体機能 (function) の進化に関する考察を始める。その理由は、スペンサーの言葉を借りれば、身体構造と機能の進化と行動の進化は相互に関連しているからである¹⁷。

まず、スペンサーは身体構造、身体機能、行動の3つははっきりと区別されなければならないと考えている¹⁸。各々は以下のように区別される。最初に身体構造の進化が起こる。次に身体構造が発展していくと、身体機能に関する進歩的な分化 (differentiation of functions) と身体機能の結合 (combinations of functions) が起こる。そして、身体機能は私たちが1つ1つ身体的行為 (bodily acts) と呼ぶものを引き起こすために様々に組み合わせられ、その過程が絶え間なく繰り返されることで行動として理解さ

16 この節の議論は、『倫理学のデータ』、第2章「行動の進化」(Spencer (1978), pp.43-55) に基づいて展開されている。

17 Spencer (1978), p.43.

18 *Ibid.*, p.43.

れている身体的行為の結合を引き起こすのである。このように、身体構造、身体機能、行動の3つは区別されるものであるが、各々の進化は相互に関連しているのである。

以上のように3つの進化について簡潔に説明したのち、スペンサーは身体機能を具体例を挙げながら説明している。スペンサーによれば以下のことをわれわれが観察する場合、われわれは身体機能について論じていることになる。それはたとえば、どのように肺が心臓から送られてきた血液に酸素を供給するか、また心臓が酸素が与えられた血液をどのように胃に供給するのを見てとる場合である。このように、スペンサーが身体機能について論じている場合は、生理学の限界を超えない範囲で、体内で起こっている過程について言及しているのである。この体内で起こっている身体機能に関して、たとえ外的環境に直接影響を与えるような身体の部分、すなわち手や足や翼などが動いている場合でさえ、それらの内的な過程や組み合わせに焦点を絞れば、われわれは身体機能について考えていると言える。つまり、われわれが身体機能について考える場合と行動について考える場合の違いは、内的な機能について論じているのか、外的にはっきりとわかるような感覚器官や運動器官の作用における結合に関して論じているのかによって生じると整理できる。

以上より、内的な身体機能を扱う場合と外的な行動を扱う場合の2つは、はっきりと区別されているが、考察対象が同じであることに注意する必要があるだろう。たとえば、腕や足や翼を動かす場合、内的な過程にのみ注意を払うのであれば、腕や脚の動きを生理学の側面から考察していることになる。そこで、行動の進化について考える際には、内的な結びつきを考えずに、専ら外的な結びつきだけを考える必要がある。

したがって、内的な結びつき全体を考慮せずに、ここでわれわれが主題とするのは、すべての外的な結びつきの集合（aggregate）である。この集合には人間によって行われる最も複雑な行動だけでなく、最

も単純な行動も含まれており、そして人間だけではなく、多少なりとも進化を遂げたと思われるすべての人間より劣っている生物によって行われる行動も含まれている。¹⁹

このように外的な側面にだけ注目することで、行動の進化について考えることができるようになるのである。

スペンサーは、行動の進化の枠組みについて論じたのち、何が原因で行動が進化するのかについて論じる。ここでスペンサーが提起する問いは、「行動の進化において、何が進歩（advance）の構成要素とされるのか」²⁰ というものである。スペンサーはこの問いに対する解答を具体例を用いて論証している。後に見ていくように、スペンサーは行為に対する目的の順応度合いで進化ないし進歩の度合いを測っている。

まず最初にスペンサーが例にあげるのは、滴虫類²¹（infusorium）とワムシ（rotifer）の行動についての具体例である。滴虫類は水中を無作為に泳いでいる。その際に泳ぐ方向を決めているのは、何かを追いかけたり、何かに追いかけられたりしていることによるものではなく、ただ様々な刺激を媒介としているだけである。つまり、外的な刺激にただ従って進む方向を決めている。したがって、滴虫類はあるときには栄養のある物質に出会うが、あるときには滴虫類を餌にする動物の近くに行ってしまうこともある。これに対しスペンサーは、「滴虫類の行動は目的にほとんど適応していない行為によって構成されており、生命が続くのは滴虫類を取り巻く環境の偶然の出来事が、滴虫類にとって好ましい場合のみである」²²と述べている。つまり、滴虫類の行動には目的がほとんどないので、環境に左

19 *Ibid.*, p.45.

20 *Ibid.*, p.45.

21 滴虫類とは、海水や淡水に広く分布している原生物。具体的には、ゾウリムシやラップムシのことを指す。

22 *Ibid.*, p.46.

右されるしかないとスペンサーは論じている。

では、ワムシの場合はどのようになっているのだろうか。ワムシは丸まっている繊毛によって動きながら滴虫類を吸い込んだり、巻きつく尻尾を使って自身をものに固定したりする。また外側の器官を引っ込めたり、身体を縮めたりして自身を脅威から守っているのである。したがって、ワムシは滴虫類よりも自身の行為を目的に順応することで、より身の回りで起こる作用、すなわち環境に左右される度合いが少ないので、自身をより長く生きながらえさせているのである。

この滴虫類とワムシの関係性をよりわかりやすくするために、スペンサーは軟体動物 (Mollusca) を用いた具体例を挙げている。ここでスペンサーが例として用いているのはホヤ²³と、イカやタコなどの頭足類 (cephalopod) である。ここでスペンサーが例証したいのは、「より程度の高い有機的な進化には、より進化した行動を伴う」 (greater organic evolution is accompanied by more evolved conduct) ²⁴ ということである。つまり、ホヤは頭足類と比較すると、目的に対する行為の順応度合い (adjustment of acts to ends) が低いのである。ホヤは自身を飲み込むことができるほど大きい海洋生物には抵抗する術を持たず、海流に身をまかせるままに泳いでいるに過ぎない。それに対し、イカは狙った獲物の後を泳いだり、自分を狙っている海洋生物から身を隠したり、時に流されないように岩場に身体を固定したりする。このように、イカはホヤよりは目的に応

23 19世紀においては、ホヤは現在の分類とは異なり、軟体動物に分類されていた。1840年代に入ると、ナメクジウオが脊索、鰓裂、背側神経索をもつことが明らかにされ、脊椎動物との類似が指摘されるようになった。そして、1866年アレサンデル・コワレフスキーによって、ホヤ類の幼生が尾部にもつ軸索状器官が、脊椎動物やナメクジウオの脊索と相同あることが示された。この発見によって、これ以降脊椎動物、ナメクジウオを含む頭索動物、およびホヤを含む尾索動物、が単系統群であることが広く受け入れられるようになった。

24 *Ibid.*, p.46.

じた行動をしていると考えられるので、目的に対する行為の順応度合いも、ホヤより高いと言える。

また、スペンサーは、脊椎動物（vertebrate animals）についても、上述した身体構造、身体機能、行動の関係は同じであり、また目的に対する行為の順応度合いの高低を見て取っている。ここでスペンサーが言及しているのは、魚類と哺乳類である。スペンサーは魚類の例として鱈を挙げ、哺乳類の例として象を考察している。

まずは魚類について見ていきたい。運任せに（at hazard）食べ物を探して泳いでいる魚は、狭い範囲内でのみ、嗅覚や視覚によって食べ物を検知できる。また時に自分よりも大きな魚の接近に気づくことができる。その意味では、その魚は種内では目的に対する行為の順応をしていると言える。しかし、そのような魚は魚類では比較的数量が少ない上に、単純なものである。結果として、そのような魚が示しているのは、生命の維持の平均的な時間がいかに短いかということである。そして、生命の維持の平均的な時間が短い魚類、たとえば鱈は、まだ卵から孵っていない稚魚や成長途中の個体が死んでしまうことの埋め合わせとして、かなりたくさん卵を産まなければならないのである。

他方、かなり進化した哺乳類である象と魚類に関して同様の行為を比較すると、象の行為は魚類のそれと比べてはるかによく目的に順応している。象は、魚類と比べて、かなり遠い距離にある食べ物を視覚と嗅覚によって発見でき、また何かから逃げる必要が生じた際、時にかかなりの速さで逃げるができる。ここに、ある1つの対比——スペンサーが明示的に論じているわけではないが——を見てとることができる。すなわち、象の方が目的に対する行為の順応度合いが高いので、生命を維持する平均時間が長いということである。

しかし、上述してきたことだけでは魚類と象の目的に対する行為の順応度合いの高さを説明しきれてはいない。魚類の目的に対する行為の順応度合いの高さと象の目的に対する行為順応度合いの高さの「主な違いは、

順応の新たな集合が加わること」(the addition of new sets of adjustments)²⁵である。言い換えれば、象の場合は様々な「補助的な(subsidiary)目的に対する補助的な行為の順応」²⁶を見てとることができるのである。たとえば、象の場合は、危険が訪れた場合に、安全を確保する手段としては、逃げるだけではなく、自分自身を守ることや、外敵と戦うことも考えられる。その際には、牙や鼻、そして大きくて重い足を組み合わせて使用するのである。さらに、スペンサー象の補助的な目的に対する行為の順応には、川に涼みに行き、川の水を自身にかけるために鼻を使い川から水を吸い上げる行為、背中にたかるハエを追い払うために小枝を使う行為などがあると言及している。

これらの事情を踏まえて、スペンサーは「より高度に進化した行動がもたらす結果が、かなり長い期間を通じて、有機的な行為の均衡を実現しているのは明らかである」²⁷と主張している。

2・2 人間に関する「行動」の進化

スペンサーは滴虫類、ワムシ、軟体動物、脊椎動物、そして脊椎動物の中の魚類、哺乳類について考察したのち、最も高次の哺乳類である人間について論じる。そして人間の行動について論じる際には、「人間は他の低次の哺乳類よりも目的に対して行為が順応している数が多くそして、その度合いが高いというだけでなく、同じことが人間という種内の高次の人間と低次の人間の行動にも当てはまる」²⁸ということを考慮する必要があるとスペンサーは主張している。つまり、野蛮人の生活と文明人の生活を

25 *Ibid.*, p.47.

26 *Ibid.*, p.47.

27 *Ibid.*, p.47.

28 *Ibid.*, p.48.

考えると²⁹、文明人の生活の方が野蛮人の生活よりも目的に対する行為の順応度合いが高いということになる。

その理由は、文明人と野蛮人の普段の活動を比較すると、文明人の活動の中には低次な人間の中に見られる目的に対する行為の順応の集合を、数や複雑さにおいても超えた目的に対する行為の順応の集合を見てとれるからである。またそれだけではなく、低次な人間においてはその類比が見て取れない目的に対する行為の順応の集合も見てとれる³⁰。そして、この目的に対する行為の順応は、生命の維持と関係を持っており、スペンサーは「数多くの目的を追求していく中で生み出される生命の複雑さがより増していくのと共に、至高の目的 (the supreme end) の構成要素である増大された生命の持続が進んでいくのである」³¹と主張する。

スペンサーは、ここで「行動の進化を補足するのに必要なものが提案される」と述べ、行動の進化の度合いを測るには、生命の長さ (prolongation of life / length of life) だけでなく、生命の活動量 (amount of life / quantity of life) を考慮する必要があると主張する。スペンサーは牡蠣とイカの例を用いて、生命の活動量という概念を説明する。牡蠣の身体構造は水中にいる自分にとっての食料を吸収できるようになっており、また牡蠣は身体が殻で覆われておりほとんどすべての危険から自身を守っているので、おそらく、水中を泳ぎ、数多くの不測の事態に遭遇するイカよりも長生きできる可能性がある。しかし、ここで考慮に入れる必要があるの

29 スペンサーは、低次な人間 (lower races of man) と野蛮人 (the savage)、高次な人間 (higher races of man) と文明人 (the civilized) を換言可能なものとして用いていると考えられる。本稿でもこの言葉は区別せずに用いている。

30 栄養に関して、文明人は野蛮人と比べて、食欲に応じて定期的に食べ物を得ることができ、そしてその種類も多く、栄養価も高い。暖をとることについての布の使用に関して文明人の方が時々気候に合わせて合わせることができる。住居に関して、野蛮人が枝や草で家を作っているのに対して、文明人の家は目的に対する順応が質においても数においても多い。

31 *Ibid.*, p.48.

が、任意の期間の中で、生命の活動量の総和（the sum of vital activities）は、イカのものよりも牡蠣のものの方がはるかに少ない。この具体例から、スペンサーが生物はただ寿命が長ければ良いのではなく、生物が活着している間にどれだけ活動したかという活動量を考慮しなければならないと考えていることがわかる。

では、スペンサーはどのように活動量を考慮しているのだろうか。スペンサーは「生命の長さ」と「生命の幅」という概念を用いてこれを説明する。「生命の長さ」が寿命の長さに、「生命の幅」が生物の活動量にそれぞれ対応していると考えられる。スペンサーが生命を考える際には、この「生命の長さ」と「生命の幅」をかけることで、生命を量的に評価していると考えられる。

この「生命の長さ」と「生命の幅」が考慮されるのは、人間についてもあてはまるとスペンサーは述べている。というのも、低次な人間と高次な人間を比較する際に、各々の平均寿命を考えるだけでは、二者の生命の全体性を全く測れていないからである。したがって、「生命の幅」を考慮する必要性が人間においても生じるのである。

次に考えなければならないのは、「生命の長さ」と「生命の幅」が、ここまでの主題となっている行動の進化とどのような関わりを持っているのかということである。これらの関係性について、スペンサーは以下のように述べている。

より発達した生物（creature）が、時々刻々とより多くの要件を満たしていくほど、その分だけ、より複雑で多様化した目的に対する行為の順応が、並行して行われている「生命の長さ」と「生命の幅」の活動をそれぞれ強化し、また同時に起こるこれらの活動が持続する期間をより長くするのにそれぞれに対して役に立っている。³²

32 *Ibid.*, p.49.

スペンサーは目的に対する行為の順応が「生命の長さ」と「生命の幅」の各々に作用しており、その順応度合いで測られる行動の進化は、生命の寿命を延ばすことに貢献しながら、生命の活動範囲を広げる原因となっていると考えている。

2・3 「個体」の行動の進化から、「種」の行動の進化へ

2・1、2・2節では、個体の行動の進化、すなわち、個人の目的に対する行為の順応について議論を展開してきたが、本節では種の行動の進化について議論を進める。スペンサーは個体の行動の進化と種の行動の進化を類比的に捉えている。

種を維持する行動は、自己を維持する行動のように、行動とは呼び得ないものから段階的に生じる。つまり、適応した行為は適応していない行為よりも後に生じるのである。³³

スペンサーによれば、個体の行動の進化の起こり方と、種の行動の進化の起こり方は同じである。個体の行動の進化については、2・1、2・2節で論じた、滴虫類、ワムシ、軟体動物、脊椎動物、そして脊椎動物の中の魚類、哺乳類、低次な人間、高次な人間についての考察を想起されたい。

スペンサーの種の行動についての考察も、個体の行動と類比的に、すなわち、滴虫類から高次な人間に至る各々の種について段階的に進む。

まず、スペンサーは原生動物 (protozoa) について論じる。原生動物は自分自身では制御できない身体的変化の結果として、無意識に分裂する。このような場合に、行動は存在はしない。そして、原生動物が少し発達す

33 *Ibid.*, p.50.

ると、この分裂の過程も発達し、精細胞や卵細胞が水の中に生み出され、運命に委ねられることになる。つまり、この細胞が成体になるかどうかは運次第ということである。というのも、原生動物の場合は、親による世話 (parental care) が欠けているからである。

原生動物は親による世話が欠けているが、魚類や甲殻類になると親による世話が見られると、スペンサーは主張する³⁴。魚類は、卵を産み落とす場所を選び、また甲殻類は捕らえられるまで、卵を自身で運んでいる。このような事例から、魚類や甲殻類は、「かなり単純な形態ではあるが、行動と呼ぶ目的に対する行為の順応を見せている」³⁵と言える。また、魚類の中にはメスが産み落とした卵を他の魚から守るオスもいるが、その場合は他の個体よりも順応度合いが高いと言える。

さらに高等な動物、たとえば鳥の場合は、巣を作り、そこに卵を産み、かなり長い期間にわたって雛鳥に餌を運ぶ。また、雛鳥たちが飛べるようになった後にも、親鳥は雛鳥を助けている。また、哺乳類の場合は、親は子供に一定期間授乳し、その後、親は子供に餌を与え、子供が餌を食べているあいだ親は子供を守り、これらのことを子供が自分の世話を自分でできるようになるまで続ける。

これらの事例は、「種の維持を促す行動が自己の維持を促進する行動と連動して進化する仕組み」³⁶を示している。では、人間の場合はどのように種の行動は進化していくのだろうか。スペンサーは、「人類は自然と似た大きな進歩 (progress) を示している」³⁷と主張している。ここで言及されている自然に似た進歩とは、下等なものから高等なものへの進歩である。

スペンサーは、「野蛮人 (brutes) と比較すると、自己を維持する行動に

34 *Ibid.*, p.50.

35 *Ibid.*, p.50.

36 *Ibid.*, p.51.

37 *Ibid.*, p.51.

においてより高次の未開人 (savage) は、種を維持する行動においても野蛮人よりも高次である」³⁸と主張する。その論拠としては、子孫が世話をされる度合いが未開人の方が高いこと、親の配慮が長く続くこと、そしてその配慮が子孫を生存の条件に適応させる術や習慣を養育することにまで拡大していることを挙げている。そしてこの行動は、私たちが未開の状態から文明化された状態へ上昇していくにつれて、大いに進化していることを私たちは見てとるのである。すなわち、子孫を養育することにおける目的への行為の順応度合いは、私たちが未開の状態から文明化された状態へ上昇していくにつれて高くなるのである。

2・4 行動における進化の極地

ここまでの箇所では、個人の生命や子孫の養育に関する目的に対する行為の順応について論じてきた。では個人の生命や子孫の養育を増進することに関して、完全に目的に対して行為が順応すれば、行動の進化が完全に成し遂げられたと言えるのだろうか。スペンサーによればその考えは誤っている。

私が言いたいのは以下のことである。これらの種類の行動 [個人の生命や子孫の養育に関する行動] のいずれかが、まだ述べられていない第三の種類の行動によって最高次の形態が想定されることなしに、最高次の形態の性質を帯びることができると思うのは誤りである。³⁹ ([] は執筆者)

スペンサーはこのように述べ、第三の種類の行動、仲間である社会の他の

38 *Ibid.*, p.51.

39 *Ibid.*, p.51.

構成員との共存に関わる行動について論じ始める。それは以下のように論じられる。

スペンサーの考えでは、地球上で生活しているあらゆる種に属する無数の生物たちは、どの種も他の種から完全に独立して生きていくことができず、多少なりとも互いの存在の中にいる。換言すれば、自分とは別の個体による干渉をある程度受けている。そして、ここまで論じてきたような目的に対する行為の順応は、「生存闘争」(struggle for existence)の構成要素になっている。

スペンサーが想定している「生存闘争」とは、同じ種のメンバーのあいだにも作用しているものであり、また違う種のメンバーとのあいだにも作用するものである。そして、ある生物によるうまくいった目的に対する行為の順応は、別の生物のうまくいっていない目的に対する行為の順応を含意している。これは同種内であれ、異種間であれ起こりうることである。また、スペンサーによれば、「生存闘争」を繰り返し、敵対しながら生活をしている種の間では、先に述べた二種類の行動(個人の生命の維持/種を維持する行動)は未だに不完全な進化しか遂げていないということになる。さらに、他の生物から与えられる恐怖が少ないであろうライオンやトラでさえも、獲物を捕らえることができないことが原因で餓死をする可能性がある以上は、種を維持する行動は完全なものではなく、行動の理想(ideal)からみれば、不完全な行動をしているということになる。

以上を踏まえて、スペンサーは第三の種類 of 行動、すなわち最高次の行動は、自己及び他者の順応を阻害しないように目的に順応するものであると論じている。

進化が不完全な行動が、完全に進化した行動と対照のものを私たちに示している。目的に対する行為の順応は、ある生物が順応に失敗することなしに別の生物の成功がなされ得ないものである。この種の目的に対する行為の順応について深く考えることで、個々の生物が、別の

生物の順応を妨げることなしに成し遂げられるであろう目的に対する行為の順応が提起される。行動の最高次の形態とは、今述べたように区別されなければならないということは避けられない含意である。というのも、ある者による目的に対する行為の順応が、別の者による非順応を必要とするものである間は、このようなことを避け、そして生命全体をより大きくしていく形態へと行動を変える修正を施す余地が残されているからである。⁴⁰

スペンサーが思い描いている目的に対する行為の順応の最高の形態は、「生存闘争」が渦巻く自然界における、ある者の行為に対する目的の順応が別の者の非順応を想定する類のものではなく、すべての生物の目的に対する行為の順応が達成されるように生命全体に向けられていることがわかる。

では、具体的にどのような条件が満たされれば行動は最も進化した段階に到達できるのだろうか。スペンサーは、個人の生命に関しては、を利己的 (predatory) なものであると考えており、また社会集団に関しては、対立を生むようなものが続く限り、行動は不完全な進化を遂げていると結論づけている。このような考察から、行動の進化の極地についてスペンサーは以下の結論を導いている。

進化の極限は、唯一恒久に平和な社会の中でなされる行動によってのみ到達し得る。個人の生命を維持し、新たな個人を養育することにおける目的に対する行為の完全な順応、すなわち、他者の完全な順応を成し遂げることを妨げることなく各々によって成し遂げられる順応は、まさにその定義のうちに、闘争 (war) が減り、そして消滅した場合にのみ到達し得るある種の行動を構成していることが示されているの

40 *Ibid.*, p.52.

である。⁴¹

ここにスペンサーの行動に関する最高次の形態とそれに到達するための条件があらわれている。行動に関する最高次の形態とは、各々の個体が別の個体の順応を妨げることなしに成し遂げられるであろう目的に対する行為の順応がなされるような行動である。そのための条件とは、闘争がなくなった「恒久に平和な社会」である。

スペンサーは「生存闘争」が渦巻く現実の社会と「恒久に平和な社会」とのあいだにある隔たりを認識している。つまり「恒久に平和な社会」に到達するためには、まだ暗示さえされていないさらなる進歩をする必要があることを自覚している。しかしそれと同時に、産業的協力によって間接的であれ、自発的な支援によって直接的にであれ、それらが行われることで社会の成員が互いに目的に対する行為の順応をより容易にすることができれば、行動の進化がかなり高次の段階まで進むことを視野に入れているのである。

このような進化した行動は、第1節で述べた行動を考える際の枠組みの中でどの部分に位置するのだろうか。また行動の進化は一般的な行動との関係はどのようになっているのだろうか。

上述したように、スペンサーは倫理が扱う行動は、一般的な行動の一部であると考えている。すなわち、一般的な行動の集合の部分集合が倫理が扱う行動ということになる。そして、集合の包含関係が大きいものから、つまり、一般的な行動をまず理解し、その上で倫理が扱う行動を理解しなければならぬとスペンサーは考えている。これは、スペンサーが、ある部分を完全に理解するには、全体を広く理解することがひつようであるとスペンサーが考えていることによる。そして、スペンサーは一般的な行動を理解するためには、行動の進化の理解が必要不可欠であると考えてい

41 *Ibid.*, p.53.

る。その理由は、倫理がその主題として有していることの中に、進化の最終段階において普遍的な行動が持つ行動の形態があるからである。その行動の形態とは、2・4節で論じた、各々の個体が別の個体の順応を妨げることなしに成し遂げられるであろう目的に対する行為の順応がなされるような行動である。

以上を踏まえれば、2つの問い（進化した行動は、行動を考える際の枠組みの中でどの部分に位置するか。行動の進化は一般的な行動との関係はどのようになっているか）に対する解答を与えることができる。進化した行動は一般的な行動の中に含まれる行動である。そして、その進化の度合いに応じて行動に対してより低次ないし、より高次という判定をすることができる。集合の外延が小さいものの方がより高次の行動である。そして、この高次の行動の中で、最も高次の存在によって示される最高次の行動が、進化の最終段階に見られる行動の形態であると言える。

2・5 考察

第1節の考察では、スペンサーが科学的という言葉を用いる際に、当時の流行であった進化の概念を用いていることに言及した。

本節におけるスペンサーの主張を分析すると、スペンサーが依拠する進化の概念の詳細が明らかになっていることがわかる。後に述べるが、スペンサーの進化の概念は、その多くをラマルクに負いながらも、ダーウィン進化論の要素、そしてスペンサー自身が提唱した進化論が入り込んでいる。

スペンサーは、個人の生命に関わる行動について論じる際には、人間を利己的な存在であると捉えている。また、個人や種の中には「生存闘争」が存在しており、まだ私たちは進化の途上にいることに言及している。この点で言えば、スペンサーはダーウィンの進化に依拠しているように思われる。

しかし、スペンサーが目的に対する行為の順応を考えており、そこには「より低次」ないし「より高次」という概念が主として用いられていることを鑑みれば、スペンサーの進化論はラマルク的であると言わざるをえない。内井（1996）や Rachels（1990）が指摘しているように、ダーウィンの進化論においては、目的の有無にかかわらず無方向に生じた変異が自然選択にかけられる。つまり、自然選択はいかなる特定の方向にも向かうことはなく、変異が有利か不利であるかは集団の棲む環境に依存しており、そこに目的を見出すことはできない。

繰り返しになるが、スペンサーは行動の進化の度合いに関して、「より低次」ないし「より高次」という概念を主に用いている。これはスペンサーがラマルク主義者が主張する、進化は1つの目的、すなわち「より高度な形態」へと向かう内的衝動によって導かれるという考えに依拠しているからであると言える。

しかし、スペンサーの進化の概念がラマルク的進化論のみに依拠していると、言い切ることはできない。というのもスペンサーが彼自身が提唱した進化の概念に依拠していることも読み取ることができるからである。スペンサー自身が提唱した進化の概念は、彼の 1857 年の論文である「進歩—その法則と要因」（Progress : its Law and cause）において論じられている。この論文において論じられているスペンサーの主張は、以下の3点に要約することができる。

- ① 能動的な力は全て1つ以上の変化をもたらし、原因は1つ以上の結果をもたらす。
- ② 万物は単純から複雑へという同一の進化をたどる。つまり、同質的なものから異質的なものへの進化を見出す。
- ③ この進化によって混沌とした状態がもたらされるのではなく、秩序がもたらされる。

ここまでの行動の進化に関わる議論において、これらの3点の論点をみてもとることができる。スペンサーによれば、原因は1つ以上の結果をもたらす、その結果、同質的なものから異質的なものへの進化が起こり多様性が増大する。したがって、逆戻りすることのない目的に向かう方向性を持った進化が想定できるのである。そして、この進化によって秩序がもたらされるという論点も、2・4節で論じた仲間である社会の他の構成員との共存に関わる行動の箇所を確認したとおりである。

以上の考察を踏まえて、スペンサーの進化の概念について、以下のように結論づけられる。スペンサーはダーウィンの進化論に全く依拠していないわけではない。確認したように自らの考えのなかに「生存闘争」を取り入れていることから、ダーウィンの自然淘汰の理論に一部依拠していると考えられる。しかし、ダーウィンは進化の方向性を想定していなかったもので、それに関してはラマルク的な進化論を採用している。そして、自身の進化の法則にも依拠している。これらを踏まえれば、スペンサーにおける進化の概念は、ダーウィン、ラマルク、そして自身の進化論という3つが複合したものであると考えることができる。スペンサーの進化論は、安易にダーウィンのものであるとか、ラマルク的であると言い得るものではないのである。

また内井（1996）は「スペンサーの議論は、いつの間にか「最も進化した」人間の社会のみに限定されている」⁴²とあるが、スペンサーは勝手に人間社会の話に限定したわけではないだろう。スペンサーは上述したような集合の包含関係を想定し、段階的に議論を進めている。James（2011）が指摘しているように、「スペンサーによると、人類の卓越性にとって重要なのは行動」⁴³であり、「動物から人間に目を移すときに見えるのは利己的行動の抑制を行う道徳的感受性」⁴⁴なのである。そして2・4節にお

42 内井(1996), p.81.

43 James (2011), p.125. 引用の日本語訳は兎玉訳に負っている。

44 *Ibid.*, p.125.

いてスペンサーが構想した恒久に平和な社会をもたらすために必要な社会的な調和を維持するためには、ある種の行動、自己及び他者の順応を阻害しないように目的に順応する行動が必要不可欠なのである。したがってスペンサーは第1節で言及した区別、すなわち人間、高等動物、下等動物という序列とその行為の目的に対する適応度合いに関して、順序立てて丁寧に議論を進めていると考えられる⁴⁵。

第3節 「行動」の善悪⁴⁶

3・1 善い行動と悪い行動

前節では、行動の進化について主に論じ、その中で、スペンサーにおける「進化」の内実について論じた。その中で、単純な生物から高等な生物までの行動の進化は、目的に対する行為の順応度合いで測られることを確認した。

本節では、行動に関して「善い」(good)ないし「悪い」(bad)という評価が与えられる場合の「善い」「悪い」という言葉が意味する内容を明らかにすることを試みるスペンサーの議論へ進む。

スペンサーは「善い」「悪い」という言葉の使われ方を調べる際に、言葉の様々な結びつきを比較し、そこに共通項を見出すことで、ある言葉の本質的な意味を見出すという方法を採用している。そして、ある言葉が様々なものに使われている場合は、大きく異なる使われ方を比較するという方法をとる⁴⁷。

45 *Ibid.*, pp.125-126 を参照。

46 この節の議論は、『倫理学のデータ』、第3章「行動の善悪」(Spencer (1978), pp.57-80) に基づいて展開されている。

47 ここにスペンサーの手法の一貫性を見てとることができる。それはすなわち、集合の一番外側の外延から、だんだんと内部に入っていくという第1節及び

様々なものに使用されている言葉の代表として「善い」「悪い」という言葉を考えることができる。たとえば、「善いナイフ」「善い銃」「善い家」⁴⁸というように「善い」という言葉が無生物に対して私たちは用いることができる。また、スペンサーは「悪い」の使用例として、「悪い傘」「悪い靴」を挙げている。

これらの「善い」「悪い」という言葉は、どのように使われているのだろうか。スペンサーは、「ここで言及されている『善い』ないし『悪い』という言葉によって述べられる性質は、そのものに本来備わっている性質ではなく、人間の欲求から離れると長所も短所も持たないものである」⁴⁹と述べている。したがって、人々がこれらのものを「善い」ないし「悪い」と呼ぶのは、所定の目的にどの程度到達しているのかによって決まる。すなわち、目的にそぐうものは「善い」ものであり、そぐわないものは「悪い」ものである。たとえば、「善いナイフ」とはよく切れるナイフのことであり、「悪い傘」とは雨を防げない傘である⁵⁰。

次に、スペンサーは生き物の場合関する議論に進む。ここで想定されているのは、「猟犬」に関する「善い」・「悪い」である。スペンサーによれば「猟犬」の善悪は、人間の目的である猟をする際に役に立つかどうか、すなわち猟をするために育てられた「猟犬」の固有の特徴をどの程度備えているかという視点で判断されるのであり、その他の特徴は問題にならない。

この判断の仕方は、道徳とは関係ない人間の行為に関しても同じであ

第2節で行動について用いた手法と同様の手法を今回も用いていると言える。

48 Spencer (1978), p.57. スペンサーは「悪い」の使用例として、「悪い傘」「悪い靴」を挙げている。

49 *Ibid.*, p.57.

50 「善い銃」は遠くまで正確に狙える銃のことであり、「善い家」は要求に沿った住居で、快適さと必要な設備が揃っている家のことである。また「悪い靴」とは足を保護出来ていない靴のことである (*Ibid.*, p.57)。

るとスペンサーは考えている。たとえば「善いジャンプ」は、ジャンプに関する即時的な目的を達成できるかが問題となるのであって、その他のことは問題とならない。

このような分析を経て、スペンサーは倫理が関わる側面においても目的の達成度合い基準にして「善い」・「悪い」の判断をすることに同意する。しかし、スペンサーは社会の中で行われる個人の行為の「善い」・「悪い」を判定するのは一筋縄ではいかないと述べている⁵¹。その理由は、社会の関係が複雑にもつれているので、ある行為がある場面では目的に対して順応しているが、同時に存在する別の場面ではそうではない可能性があるからである。スペンサーが想定している場面は3つある。3つの場面とは、それぞれ「自己の福利」「子孫の福利」「仲間の福利」である。スペンサーは、各々の場合に照応して、「相対的な善さ」および「相対的な悪さ」を行為に見出す必要があると述べている。

3・2 「自己の福利」・「子孫の福利」・「仲間の福利」

まずは、「自己の福利」について論じる。端的に言えば、「自己の福利」は、個人の生命を促進することである。たとえば、戦闘中の人が良い防御をしていると判断されるのは、その防御が自己保存の観点によく適応している場合である。人は自身の健康と福利をまず維持する必要があるとスペンサーは述べている。つまり、「自己の福利」は自己保存という目的に行為がどれくらい順応しているのかによって測られると言える。スペンサーによれば、「自己の福利」の道徳的側面が強調されることが少ないのは、自己配慮に関わる欲求の促進は、通常十分に強いものであるので、道徳的な強制（moral enforcement）が必要ないからである。

次に、「子孫の福利」についてである。「子孫の福利」は「自己の福利」

51 *Ibid.*, p.58.

と対照的であるとスペンサーは考えている。というのも、「子孫の福利」は他者配慮に関わる欲求の促進は、通常あまり強いものとは言えず、それゆえに、道徳的な強制が必要であるからである。子孫の養育に関わる善悪は、子育てに関して有能であるか無能であるかという観点で測ることができる。たとえば、子供のために身体的にも、精神的にも尽くしている母親は良い母親であるが、家族のことを顧みず、家族を身体的あるいは精神的に傷つける父親は悪い父親であると、スペンサーは述べている。この場合の「善さ」・「悪さ」は、子供たちの生命を促進するのに、どれほどその手法が身体的、精神的な要請に適応しているかでもって測られるのである。

最後に「仲間の福利」についてである。この「仲間の福利」に関わる行動の善し悪し、すなわち、人々が互いに影響を与え合う行為を構成している行動に対して使用される「善さ」・「悪さ」は最も強調されるべきだとスペンサーは考えている。というのも「個人の福利」に関わる行為、「子孫の福利」に関わる行為の目的に対する順応が、「仲間の福利」に関わる目的への順応を阻害することもあれば、その逆もまた考えられるからである。

なぜ「個人の福利」と「子孫の福利」に関わる行為の目的への順応が、「仲間の福利」へのそれを妨げるのだろうか。スペンサーの想定では、人が、各々の生命を促進する行為に干渉することで引き起こされる悪影響が大きいからである。したがって、「仲間の福利」に関する行為の善し悪しは、他者の完全な生を促す行動は「善い」行動であり、それを妨害する行動は「悪い」行動である。

善さは以下の行動を連想させる。病気の人が再び通常元気を取り戻すことを支援する行動や、貧しい人が自己の維持をする手段を回復するのを手助けする行動、直接危害にあっている人、所有物、評判を守る行動、またすべての仲間の生活を向上させるような約束を何であれ支援する行動などである。それに対して、悪さが連想させる行動は、

生活をしている際に、他者の身体を傷つけることで他者の生活を損なう行動、所有物を破壊する行動や、他者を誹謗中傷する行動である。⁵²

この引用部から、スペンサーが他者の生を促進する行動は「善い」行動であり、他者の生に対して危害を加え、他者の生を促進することを妨げる行動は、「悪い」行動であるというように考えていることがわかる。

3・3 善さの検討

3・1節では、スペンサーが想定している3つの福利とその内容について論じた。本節では、各々の相対的な善さについて論じる。先に論じたように、スペンサーは、「自己の福利」「子孫の福利」「仲間の福利」のそれぞれの場合を参照して、「相対的な善さ」および「相対的な悪さ」を行為に見出す必要があると述べている。しかし、「相対的な善さ」、「相対的な悪さ」を考慮する場合にもスペンサーが貫徹している関係が、行為と目的の関係である。

行為が善くないし悪いと呼ばれるのは、常に、その行為が目的に対してよく順応しているか否かに応じてである。そして、この善い・悪いという言葉の使用において存在するいかなる不一致も、目的の不一致から生じるものである。⁵³

引用部の前半に関しては、これまで論じてきたことである。ここでスペンサーが考慮しているのは、目的の不一致である。ここで想定されている目

52 *Ibid.*, p.60.

53 *Ibid.*, pp.60-61.

的とは、上述した3つの福利のことである。つまり、どの福利を優先する
のかで、ある行為の善し悪しが変わってしまうのにどう対応するかである、
と言い換えることができる。

「自己の福利」の場合、第2節で言及したように、「善いと呼ばれる行
動は、相対的により進化した行動であり、悪いと呼ばれる行動は、相対的
に進化の度合いが低い行動である」と言えるので、個人の生がその幅にお
いても長さにおいても最大化したとき、自己保存へと向かう進化は極限に
到達したと言える。しかし、考慮しなければならないのは、この目的は他
の目的を形式的には考慮に入れていないということであるとスペンサーは
述べている⁵⁴。

「子孫の福利」の場合はどうだろうか。個人の生を維持する力が増して
いくにつれて、子孫を養育し、種を存続させようとする力が増していく。
すでに2・3節で言及しているが、種の維持を促す行動は、自己の維持を
促進する行動と連動して進化する。また、種の存続に必要な数の子孫が、
大人になるまで守られ、完全性と持続性において完璧である生に適応する
とき、進化が極限に到達する。ここで明らかになったのは、親の行動が善
くないし悪いと呼ばれるのは、前文で述べた理想的な行動にどれだけ近づ
いているか、また離れているかに応じてである、とスペンサーは述べてい
る⁵⁵。

最後に、「仲間の福利」についてである。「仲間の福利」を最大化する
ような行動は、個人、そして子孫において生が完成し得る他者の福利を害
さないだけでなく、他者の福利を増進する行動の形式を可能にするもので
ある。この形式の行動の形態が必要なのは、個人、子孫、仲間の3つの福
利が最高の完全性を実現している行動の形態が、最も善いと強調される行
動だからである。そして、行動が個人、子孫、仲間の3つの目的を同時に

54 *Ibid.*, p.61.

55 *Ibid.*, p.61.

完全に満たすとき、これらのそれぞれの福利の観点で、善いと称されていた行動は、最善 (best) と称される行動へと向上する、とスペンサーは論じている⁵⁶。

3・4 楽観主義・悲観主義

本稿は3・1節から3・3節にかけて、善いと称される行動にはどのような行動があるのか、そしてその行動はどのような目的に順応するのか、そして善さをどのように決めればよいのか、さらに最善と称される行動についてスペンサーの議論に沿って論じてきた。善いと称される行動は行為の目的に対する順応がなされている行動であり、目的には、個人・子孫・仲間の福利があり、その目的に対して相対的に行動の善さが決定され、各々の3つの目的を同時に満たすような行動を最善の行動であった。

本節では、スペンサーが行っている善悪の分析を検討する。内井(1996)の言葉を借りれば、「これまでの話は、ある目的を実現するための手段としての行為の善悪に関わるものでしかなかった。その目的自体に関する価値判断がすべての倫理的論議の大前提として残っている」⁵⁷のである。ここで、スペンサーが問うのは、彼がすべての倫理に関わる問の根本をなしている重要な問い、すなわち「人生は生きるに値するものであるか」⁵⁸ というものである。

「人生は生きるに値するものであるか」に対して、「値する」と返答するのが楽観主義者であり、「値しない」と返答するのが悲観主義者である。この問題はスペンサーにとって重要な問題である。なぜならば、人生は生きるに値しないものであるという悲観主義者の想定が正しいとすると、ここまで使用してきた進化の仮定、すなわち、行為に対する目的の順応度合

56 *Ibid.*, p.61.

57 内井(1996), p.83.

58 Spencer(1978), p.62.

いが向上することで、生命が促進されるということが間違いであったことになるからである。私たちは、楽観主義を採るのがよいのか、悲観主義を採るのがよいのか、また、悲観主義と楽観主義の議論を比較検討したら、条件付きであったとしても楽観主義を支持すると結論できるのだろうか。

上述したように楽観主義と悲観主義は、相対する主張である。スペンサーによれば、「生ある存在」(animate existence)に対して、そのようなものは存在しない方がよいと考えるのが悲観主義であり、「生ある存在」に賛同し、将来その優位度合いが増していくと考えるのが楽観主義である。また、このような議論から長く生きることを肯定するのが楽観主義であり、それに対して反対の主張をするのが悲観主義である。

このように真正面から拮抗する楽観主義と悲観主義に対して、どちらの主張が採るべきなのかを決めるために、スペンサーはこれらの中に共通項を見出す。スペンサーはその際に善と悪という言葉遣いが、楽観主義と悲観主義では正反対であると述べる。この言葉遣いの決まり方に関して、スペンサーは以下のように述べている。

悲観主義者と楽観主義者が同意する1つの想定がある。どちらの側の主張も、生が善いか、悪いかは、それが快の感情の余剰を生み出すか否かに応じて決まるということを自明であると想定している。悲観主義者なら、私が生を非難するのは快樂ではなく苦痛がもたらされるからであると言う。楽観主義者なら、生は苦痛ではなく快樂をもたらすと信じて、生を擁護する。⁵⁹

スペンサーは楽観主義者と悲観主義者が使う善と悪という言葉、快樂と苦痛という観点で捉え直している。快樂と苦痛を両極に想定し、その中点よりも快樂の度合いが多い場合、それを善いと捉える。また、中点よりも

59 *Ibid.*, p.63.

苦痛の度合いが多い場合、それを悪いと捉えている。つまり、生きることに関して快樂が多いので善いと考えるのが楽観主義で、苦痛が多いので悪いと考えるのが悲観主義である。また、行動が個人、家族、社会の保存に貢献すべきであると考えられるのは、生が悲惨さではなく幸福を生み出すからであるとスペンサーは述べている。このようにして、私たちは快苦に応じて、善悪が決まるという考え方に到達する。つまり、楽観主義者であれ、悲観主義者であれ、快樂と苦痛という判断基準を共有しており、そしてそれに同意しているとスペンサーは主張している。

生を促進する行動を善いと見なし、それを妨害したり壊したりする行為を悪いと見なし、生は恩恵であり災いではないということが含意されているとすると、私たちは紛れもなく以下のことを主張しているのである。すなわち、全体の結果が快樂が多いか、苦痛が多いかに応じて、行動の善し悪しが決まると主張せざるを得ないこと、このことを認めないわけにはいかない。⁶⁰

スペンサーが快苦に応じて行動の善悪が決まるという立場をとる根拠は、一部の人を除き、大多数の人が、本節で言及した楽観主義を採用しているという事実に依拠している。

3・5 考察

本節では、前節の行動の進化の概念の議論を進め、行動の善悪について論じた。スペンサーの議論の前提になっているのは、「善い」と呼ばれる行動は、相対的により進化した行動であり、「悪い」と呼ばれる行動は、相対的に進化の度合いが低い行動であるというものであった。そして、進

60 *Ibid.*, p.64.

化の度合いは目的に対する行為の順応性にあった。

第3節においては、スペンサーがいつの間にか科学的な進化の話から、倫理の話に移行しており、いきなり善悪、そして快苦について論じ始めた印象は拭い去れない。行動の目的適合性、善悪、快苦の関係はどのように整理されるのだろうか。

第1節で論じたように、スペンサーは人間の行動一般の考察から倫理が扱う行動へと話を移していく際に、日常的な行動から善悪の判断がなされる行動への移り変わりが漸次的であると考えており、そして、道徳性が考慮されない行動が、道徳性を備える行動に少しずつ変わり、またその変化の仕方は無数にあると考えている。そして、行動が道徳的であるかどうかを判断するとき用いられていたのは、目的や手段を選択すること自体が倫理的な性格を有しているという考え方であった。ここには、第2節で言及したスペンサーの進化論における中心概念である多様性がみてとれる。

下等動物や高等動物の場合も、人間の場合も、「善い」と呼ばれる行動は、相対的により進化した行動であり、「悪い」と呼ばれる行動は、相対的に進化の度合いが低い行動である。そして、その際には個人の福利、子孫の福利、仲間の福利という3つの次元の目的が考えられるようになる。行動が個人、子孫、仲間の福利という3つの目的を同時に完全に満たすと行動は、最善の行動となる。

スペンサーは明示していないが、仲間の福利の際に用いられる例は人間に限定されている。この仲間の福利を考慮している段階と、その他2つの福利を考慮している段階の間で道徳的な線引きをしていると考えることができる。仲間の福利を考慮するという事は、他人に対する責務があるということになる。したがって、高次な人間の場合は行動の中に倫理性を考慮しなければならない。

ここまでの議論においては、行動の進化による目的適合度合いと善悪が対応していた。目的への適合度合いが高い行為は善い行為である。それでは、快苦に言及する意味はどこにあるのだろうか。Rachels (1990) は、

聡明なスペンサーは、ヒュームの問題、すなわち「である」から「べき」を導けないという反論を想定していたので、快苦について考えていると主張している⁶¹。しかし、この推論は誤っていると思われる。なぜなら、スペンサーが問うているのはそもそも「人生に生きる価値があるのか」という倫理における根本問題であり、また全体から部分についての考察を一貫しているスペンサーにとっては、行為の目的に対する適合度合いが従来の倫理の行動の枠組みで妥当するかどうかを検討する必要があったからである。さらに言えば、『倫理学原理』においてスペンサーがヒュームについて言及している箇所は一箇所もなく、スペンサーが『倫理学原理』の中で、ヒュームを意識しているとは考えにくい。

スペンサーは伝統的に倫理が扱ってきた善悪についてどのように捉えているのだろうか。スペンサーは、プラトン、アリストテレス、キリスト教倫理、エドワーズ、ハチスンなどを挙げ、従来の倫理の体系は大別すると次の4つのうちのいずれかに重きを置いてきたと論じている。それは、(1) 行為者の性格 (the character of agents)、(2) 行為者の動機の性質 (the nature of his motive)、(3) 行為者の行動の質 (the quality of his deeds)、(4) 行為の結果 (the results) である⁶²。これらに関して、スペンサーは1つの共通項を見出す。それは快苦の概念が善悪に結びついているというものである⁶³。したがって、スペンサーの倫理学における眼目の1つに「善」は「快樂」であるという考えがあるのは間違いない⁶⁴。

61 Rachels (1990), p.68

62 Spencer (1978), p.67.

63 このスペンサーの分析は問題含みである。スペンサーは、倫理の様々な体系の中で言及される善を快樂と同一視している。これがスペンサーに対して、快樂主義的功利主義者 (Hedonistic Utilitarianism) であると言われる所以である。

64 この観点は、スペンサー倫理学についてまわる自然主義的誤謬に関するものである。本稿はあくまでスペンサーの行動概念について論じるものであるので、これについて詳細に立ち入ることはしない。

スペンサーは行動の進化においては目的適合性を重視している。したがって、行為の目的の適合度合いが高いものが「善」である。倫理においては、その体系の中には快苦の概念が入りこんでおり、「快樂」は「善」と結びつく。これらを総合すると、生を促進する行動はその目的の適合度合いで「善さ」が決まる。そして、倫理の枠組みで捉えれば、それは「快樂」が「善さ」であるので、全体として快樂の量が多いか、苦痛の量が多いかに応じて、行動の善し悪しが決まるのである。したがって、自然的進化（*natural evolution*）の理想である最高次の行動の形態である、各々の個体が別の個体の順応を妨げることなしに成し遂げられるであろう目的に対する行為の順応がなされるような行動は、最高次に理想的な倫理的な行動である快樂しか含まない行動と同じであると結論されるのである⁶⁵。

おわりに

本稿では、スペンサーの行動概念について論じ、その内実を明らかにした。スペンサーの行動概念に関する基本的な視座は、全体から部分を考えていくというものであり、スペンサーの考察は行動一般から倫理が扱う行動へと進んでいき、日常的な行動から善悪の判断がなされる行動への移り変わりが漸次的（*gradual*）であった。

そして、このような行動の進化の度合いは、「目的に対する行為の順応度合い」で測られるものであった。そして行動には、個体の生を保存するもの、子孫を維持し種を繁栄させるもの、そして社会の構成員に向けられるものがあり、そして、行動の最高の形態はすべての生物の目的に対する行為の順応が達成されるように生命全体に向けられている。このような進化論にはスペンサーが行動の進化の議論から、スペンサーが依拠する進化論がダーウィン、ラマルク、スペンサー自身の進化論という3つが複合し

65 *Ibid.*, p.79.

た進化論が土台になっている可能性について論じた。

最後に、倫理の領域内での行動について論じた。「善さ」と「悪さ」は目的適合性によって測られるものであった。「より進化した行動」は、より目的に適った行動であるので、相対的に善い行動である。また、従来の倫理学で語られる「善さ」は「快楽」に還元されることから、倫理の枠組みでは「快楽を増大させる行動」は相対的に善いということになる。したがって、進化の度合い最高次の行動の形態と最高次に理想的な倫理的な行動は同じであると考えられるので、善さと快楽はスペンサーの中では一致しているのである。

このように考えると、スペンサーは複合的な進化論を土台とした功利主義を構想していると考えることができる。スペンサーが功利主義者であったか否か、また功利主義者であるならばどのような功利主義者であったのかに関しては議論の余地がある。しかし、本稿で論じてきた範囲で言えば、複合的な進化論を土台とした功利主義的発想があることは間違いないだろう。したがって、内井(1996)が主張する「スペンサーは、結局、快楽説あるいは功利主義の倫理学に進化思想(実は進歩主義)の衣を着せて、『進化論的倫理学』として売り出した」という解釈は反転していると言わざるをえないだろう。スペンサーはあくまで、進化論を土台にした功利主義を想定していると考えるのが妥当である。

また、善を快楽と同一視しているのは、スペンサーが自然主義的誤謬を犯しているのではないかという批判が想定される。上述したスペンサーと功利主義の問題、そしてスペンサーと自然主義的誤謬の問題の詳細に関しては、稿を改めて論じたい。

文献表

Farber, P. L. 1998. *The Temptations of Evolutionary Ethics*. California: University of California Press.

Rachels. J. 1990. *Created from Animals, The Moral Implication of Darwinism*.

- Oxford, New York: Oxford University Press. [古牧徳生・次田憲和訳
『ダーウィンと道徳的個体主義』、晃洋書房、2010年。]
- James, S. M. 2011. *An introduction to evolutionary ethics*. Brackwell. [児玉聡訳
『進化倫理学入門』、勁草書房、2018年。]
- Spencer, H. 1851. *Social Statics: or, The Conditions essential to Happiness
specified, and the First of them Developed*. London: John Chapman.
- Spencer, H. 1857. "Progress: its Law and cause". *Westminster Review*. [清水幾太
郎編『コント / スペンサー』〈中公バックス世界の名著 46〉、中央公
論社、pp.397-442、1980年。]
- Spencer, H. 1978 [1879-93]. *The Principles of Ethics*. 2vols, In T. R. Machan ed.
Indianapolis: Liberty Fund.
- 内井惣七 1996 『進化論と倫理』世界思想社。
- 垂水雄二 2014 『科学はなぜ誤解されるのか——わかりにくさの理由を探
る』、平凡社新書。
- 西脇与作 2004 『科学の哲学』慶應義塾大学出版会。
- 挟本佳代 2000 『社会システム論と自然』法政大学出版局。
- 森村進 2017 『ハーバート・スペンサー コレクション』ちくま学芸文庫。

(ひさの・まさたか 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程)

Spencer's Concept of Conduct

Masataka HISANO

In *The Data of Ethics* (1879), Spencer claims that establishing rules of conduct on a scientific basis is a pressing need. The reason why Spencer maintains this opinion is that as moral injunctions lose the authority given by their supposedly sacred

origin, their secularization becomes imperative.

The primary objective of this paper is to examine Spencer's concept of conduct. First, this paper will outline Spencer's understanding of conduct, according to *Conduct in General* (Chapter 1). Second, this paper will carefully consider the relationship between conduct and evolution, according to *The Evolution of Conduct* (Chapter 2). Third, on the basis of the discussions about these two matters, the paper will examine good and bad conduct, according to *Good and Bad Conduct* (Chapter 3). Finally, based on the above, this paper will discuss the issues that arise from Spencer's concept of conduct.